# 小坂郷・小坂荘から探る加賀の国のルーツ

## ――北陸開拓にいどむ五十日足彦命の一族と御所八塚山古墳群――

The Origin of Kaga Area by Researching "Kosaka-Go" and "Kosaka-Sho" – The family of Ikatarahiko-no-Mikoto who tried to develop the Hokuriku Region, and Gosho-yatsutsukayama ancient tombs –

風間幹栄
Mikiei KAZAMA

## 一、はじめに

能登国と加賀国をもって現在石川県が成立していますが、今年その加賀国の立国一二〇〇年の年となります。

律令国家の地方行政区画においては、弘仁十四年（八二三）越前国から江沼郡と加賀郡を分割し成立した最後の国、これが加賀国です。分割したその年、さらに江沼郡から能美郡、加賀郡から石川郡が分立しました。加賀国のルーツについては未だ不明なところが多くあります。

例えば、加賀という名称はどうようにして付けられたのか、能美という名前の由来についてはどうなのか、また、加賀国府の所在地はどこか、さらに加賀郡を勢力下に治めていた道君（ミチノキミ）の祖先とはいったいどんな人物なのかの疑問点が多くあります。

古代は史料のほとんどない時代です。少しの文献（記紀、先代旧事本紀国造本紀）と地元の言い伝えや伝承、その地域とともに歩んできた神社の歴史を調べながら探っていくことで古代歴史を解き明かしていこうと考えました。

加賀国のルーツになる神社を探り、辿り着いたのが石川県小松市に鎮座する滓上（カスカミ）神社でした。祭神は垂仁天皇の皇子である五十日足彦命（イカタラヒコノミコト、日本書紀に記載）とその一族で、霊峰白山の山岳信仰と繋がり、加賀地方を支配した道君と関係しているとの推論に至りました。

そこで、この道君の祖素都乃奈美留命（ソツノナミルノミコト）とは誰か。道君の拠点を金沢市の小坂の地としました。この地方を

昔加賀郡といい、丘陵には御所八塚山古墳群があります。前方後円墳が一基ある加賀地方では珍しい古墳となっており、私立星稜中学・高等学校の校舎裏山にあります。

この御所八塚山古墳群の埋葬者は、一説に道君の古墳とも言われており、私はこの説を踏襲しています。道君の発祥の地を白山麓の白山市の八幡町や河内町に求めているのが定説になっていますので、この道君と小松市に鎮座する淳上神社とを結びつけようとしているのが私の考え方です。

御所八塚山古墳群にまつわる伝承を今も大切に地域の子どもに伝えるべく活動しておられる方々がおられます。別の観点からの見解としての私の考えも多くの方々に参照していただければ幸いに存じます。

八塚山古墳群（4号墳と5号墳＝4号墳）

【御所八塚山古墳群の測量図】
（小坂公民館提供）

石川県立金沢桜丘高等学校

星稜中学・高等学校

金沢星稜大学・金沢星稜大学女子短期大学部

【小坂公民館遺跡クラブ】
（柴田博さん資料より提供）

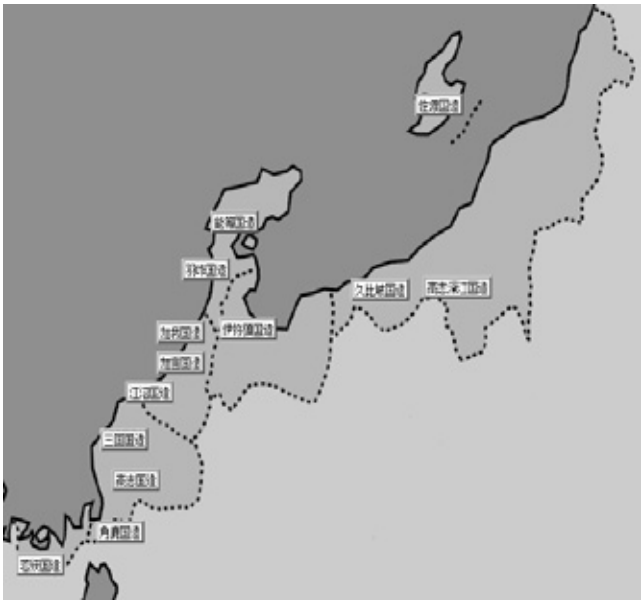
## 二、古代の地方支配について

『先代旧事本紀』「国造本紀」による北陸道の国造の図表をみます。

高志国　若狭国造　角鹿国造　高志国造
三国国造　江沼国造　加宜国造
加我国造　羽咋国造　能登国造

伊弥頭国造　久比岐国造
高志深江国造　佐渡国造

https://mononobe-muraji.blogspot.com/2021/11/hokurikukokuzou.html2023/03/23




次に七世紀に設けられた石川県の行政区分を説明します。(註①) 北陸道に属した越前国の支配下には江沼郡、加賀郡、羽咋郡、能登郡、鳳至郡、珠洲郡が含まれます（当時の越前国とは、福井県と石川県という広範囲の地域が含まれ国司が支配する）。

その支配組織には、国→郡→里があり、七一五年里は郷に改称、郡―郷のもとに里が置かれ郷里制となります。のちに里は消滅し郷のみ残ることになります。中央から国司が派遣され、地方には郡司という役人が置かれ、かつての国造が任命されました。

その中の加賀郡の郷には八郷、石川郡には八郷があり、村や人を支配していました。

この加賀郡の郷については、『和名類聚抄』に記載されています。大野郷・玉戈郷・大桑郷・田上郷・芹田郷・井家郷・英多郷・駅家郷とあり、この地域にあたる小坂郷は記載されていません。しかしながら、八世紀後半の奈良時代末の正倉院文書には、小坂郷が見えます。

越前国加賀郡のうち、宝亀五年（七七四）十二月二十四日の調田庭継解の紙背の、年紀を欠く優婆塞貢進文に「越前国加賀郡小坂郷戸主道公人守戸口」と記載されています。この小坂郷の郷戸（一郷戸は五十戸、一戸の住民は二十から三十人程度、一郷戸は一五〇〇人を支配する）の長であり、郡司の役人としての立場でもあり、家族の申告書を綴る紙背文書として記載されています。この道君（公）を探ることにします。中世には、小坂庄が出現します。永仁七年（一二九九）三月五日附、亀山法皇の禅林寺に与えた起請文に加賀国小坂庄とあるのが最も古い記録とされています。

## 三、道君の誕生について

(註②)『先代旧事本紀』「国造本紀」の道君に関する史料には次のことが述べられています。

高志深江国造。磯城瑞籬朝御世。

道君同祖。素都乃奈美留命定賜国造。

崇神天皇（十代）の御世

能等国造。志賀高穴穂朝御世。

活目帝皇子大入来命孫彦狭嶋命定賜国造。

成務天皇（十三代）の御世

加宜国造。難波高津朝御世。

能登国造同祖素都乃奈美留命定賜国造。

仁徳天皇（十六代）の御世

この道君とは、いったい何者か探ることとします。道君について、「クニの名」と「姓の名」が一致していませんが、(註③)この道君の発祥地は白山市河内町の久保の春日神社、白山市八幡町の八幡神社の地域であるとし、(註④)発展地として金沢市の小坂地区を挙げ、「森下川・金腐川流域を本拠として、かつて、加賀北半を統治圏していた国造級の有力首長の道君によって占められた。」と述べていますので、この関係性を調べることにします。

前述の史料の道君の始祖の素都奈美留命の読み方はついて「ソツ［スツ］ノナミルノミコト」と読みますが、この道君の祖素都乃奈美留命と能等臣の祖の出自についての取り扱いが、(註⑤)『古事記』、(註⑥)『日本書紀』、『先代旧事本紀』によって異なっていることが問題となっています。『古事記』では能等国造の出自を崇神天皇の皇子大入杵命とし、『日本書紀』では能等国造の出自を垂仁天皇（活目帝）の皇子大入来命とし、『先代旧事本紀』では『日本書紀』を採用しています。大入杵命と大入来命は同一人物だとされています。この矛盾する事柄を『先代旧事本紀』では、『日本書紀』の垂仁天皇の系統にしていますが、なぜ、日本国の正史である『日本書紀』の書き記した能等国造と同族道君となったのか、この観点から道君を捉えていきます。(註⑦)「加宜国造」と名乗っていた道君として加賀地方に一大勢力圏を形成していき、「加賀国造」となり最終的には郡名となっていったと思われます。

前述した八世紀後半の道公の存在以前にも、道君が登場します。(註⑧)欽明三十一年（五七〇）四月二日の詐称事件に、江停（江沼）臣と道君の存在を示す史料が記載されており、道君が六世紀後半には加賀郡で一大勢力圏を形成していたことがわかります。

## 四、道君の発展地の御所八塚山古墳群と発祥地との関係について

御所八塚山古墳群については、(註⑨)「古墳前期の北加賀の政治勢力の拠点は、この小坂・森本地区であり、北加賀をカガ（香々・加我・加賀）のクニとして統治していた「国造本紀」にいう加我国造道君の本来の基盤とみなす説が有力である。」とあり、また、「推定郷域内に、小坂古墳群・御所八塚山墳群・神谷内古墳群・東長江横穴群のほか、田中遺跡・乙丸遺跡などの集落跡が集中し、北接する加賀郡井家郷とともに、北加賀の国造勢力が律令期に越前国加賀郷の郡領氏族となった道君の本拠地と目される。」となっています。この道君の発祥の地について、(註⑩)森田喜久男氏も「道君の発祥の地は、加賀立国以降に加賀郡から分離した石川郡味知郷である。おそらく白山市の旧鶴来町から手取川上流にかけての一帯であろう。」と述べています。この発展地と発祥地を繋げるのが、御所八塚山古墳群の埋葬者です。この埋葬者を祀るのが、小坂郷に鎮座する小坂神社、旧名春日神社であると考えます。この神社の成り立ちの背景を知ることによって発祥地へと繋げていきます。

## 五、小坂に鎮座する小坂神社から探る道君

小坂神社（旧春日神社）、養老元年（七一七）創建。(註⑪)「社伝に曰く、師が白山参籠のとき天児屋根命の霊夢に、山の東北に当り一の霊泉ありと。帰路之を求むるに果して一の霊水あり。此の泉流を以て灌漑せしむるに五穀能く豊熟せり。居民神祠を建て名けて神田の大神と尊敬す」。この天児屋根命とは、どんな神かを探ると、次の通りです。枚岡神社の神様（東大阪市、元春日と称す）では、天児屋根命を春日神といっています。また、天照大神高座（たかくら）神社では天児屋根命を春日戸神（かすかべのかみ）といっています。さらに、この枚岡神社の神木は柏槇（びゃくしん）であり、注連縄掛神事などの伝統行事も伝わっています。これらの特色が、後述する滓上神社と繋がることになります。

「師」という白山信仰の開祖泰澄大師と天児屋根命との関係を考えると、小坂神社、旧春日神社の創建は養老元年（七一七）となっており、奈良春日大社の創建が神護景雲二年（七六八）ですので、養老元年の創建時の神社名は、史料に記載されているように神田の大神を祀る神田神社となります。しかし、泰澄大師の白山参籠を考えますと、白山信仰の発祥地と同様に道君の発祥地白山市の旧鶴来町から手取川上流にかけての一帯からの出現と重なります。春日神と道君を繋ぐ第一歩としました。小坂郷に神田神社が鎮座する以前

の加宜国造道君の時代を示す欽明天皇三十一年（五七〇）の詐称事件に於いても、小坂地域に勢力をもっていたことは明らかなので、当然ながら道君一族が祀る「社」が存在していたと考えます。(註⑫)今も残る地名に春日山がありますが、別名を帝慶山（ていけいざん）と言います。帝慶山と詐称事件に関する天皇の存在が、ここに見え隠れします。

また、その後の神社の発展については社伝の続きに「養老七年（七二三）師が国司に謀り、社殿を大宮造改め、神田神社と号し（中略）天慶五年（九四二）更に国司に請ひ社殿、摂社、前宮、則ち社殿を大宮造りに各坊は伽藍造りに楼門、中門、御供所、護摩堂、講堂、絵馬堂、御手洗、鳥居等に至る迄、悉く再興し」と書き記しています。神田神社が神仏習合して発展したことを意味します。

小坂神社の鳥居、拝殿の写真

## 六、白山市河内地域の春日神社、八幡地域の八幡神社について

小坂神社（旧春日神社）では、泰澄大師が白山参籠のとき天児屋根命の霊夢をみたところから、白山方面から山伝えに小坂へやってきたとの伝承があります。白山信仰の開山泰澄大師からして、白山市河内の久保地域、八幡地域からと考えるとこの地域に伝わる伝承と合致します。(註⑬)その伝承には、「久保は今も春日明神の社旗を立て」「又八幡（やはた）の様にはじめの春日明神を祀って春日村と呼んでいたものが、其の後八幡宮を勧請し祀る様になって祭神の八幡村と呼ぶ村名とした処もある。」と記されています。この地域で祀られている春日神こそが天児屋根命であり、道君が祀る神と考えます。この春日神を祀る道君はどこから来たのか。この地域に存在する姓「君」と称する一族はいない、とすれば小松の中海地域に鎮座する滓上神社を想定して考えました。

白山市八幡の八幡神社
（獅子吼高原の麓）

## 七、滓上神社についての式内社調査報告

創建は遼遠（りょうえん）大寶二年四月（七〇二）となっていますが、創始年代は不詳となっている神社です。(註⑭)「本居宣長は、『古事記傳』寛政十年〈一七九八〉廿四に「神名帳に加賀ノ國能美ノ郡滓上ノ神社あり、此はカスガミかカスガベとも訓マるゝなり」と述べてゐる。『古事記』では「五十日帶日子王者（分註）春日山君、高志池君、春日部君之祖と記されてゐるところより導かれた訓であろうか。」『古事記』の訓注では、春日部君の所在が明らかになっていないとしています。

以上からして、春日山君がいた地域や神社、高志池君がいた地域や神社は明らかになっていますが、春日部君は不明です。しかも、「カスガミ」か「カスガベ」とも訓マると本居宣長が指摘しています。このカスガベが滓上神社の五十日帶日子王の一族としたならば、天児屋根命の存在、鶴来から発生した道君の「姓」である「君」の名称の共通点が明らかになります。

① (註⑮)枚岡神社の神様を春日神といいます。また、天照大神高座神社では春日戸神（かすかべのかみ）といい、滓上神社の「カスガベ」と一致します。

② (註⑯)枚岡神社の神木が柏槇で、滓上神社の奥宮の神木も柏槇です。柏槇の別名は伊吹山（いぶきやま）から名付けられた「伊吹」と称します。古代信仰陰陽思想からくる五芒星に位置する山ですので、枚岡神社の注連縄掛神事や、柏槇は神木として大変貴重な木となります。(註⑰)滓上神社の奥宮では、昔注連縄を新しく替え、その下付を受け、その参拝者が越前、能登から訪れたと言います。

③ (註⑱)垂仁天皇の皇子大入来命とすれば、加賀、能登の古代豪族羽咋君（はくいのきみ）・大兄彦君（おおえひこのきみ）もすべて垂仁天皇の系統ですので国造の姓としては特異な地域と言えます。

④ (註⑲)小坂神社は旧春日神社といいます。古代においても神田神社創建以前は春日部君からの春日社と称し、その山を帝慶山といい別名春日山といったと思われます。この「帝が慶ぶ」の帝こそが垂仁天皇を指すのではないかと考えます。まさに、詐称事件の頃が該当する時代になります。

⑤ 御所八塚山興奮群所有の地権者の出島さん方の伝承によると「観音様が夢枕に現れ、暁（あかつき）に軍鶏（しゃも）が鳴いた時、古墳の発掘は許される。それ以外では神罰があたる」という。まさに「天の岩戸隠れ」の神事を執り行う天児屋根命と小坂神社の伝承の「泰澄大師の夢枕に出現する天児屋根命」の伝承、白山信仰のもと白山の神の本地垂迹の本地仏であるという十一面観音により解き明かすことができます。故に、五十日帶日子王の一族春日部君が道君の祖素都乃奈美留命

であり天児屋根命の姿に代えて、この加賀地方に出現した道君一族の墳墓としての御所八塚山古墳群であることがわかります。

淳上神社の鳥居・拝殿、奥宮神木（柏槙）

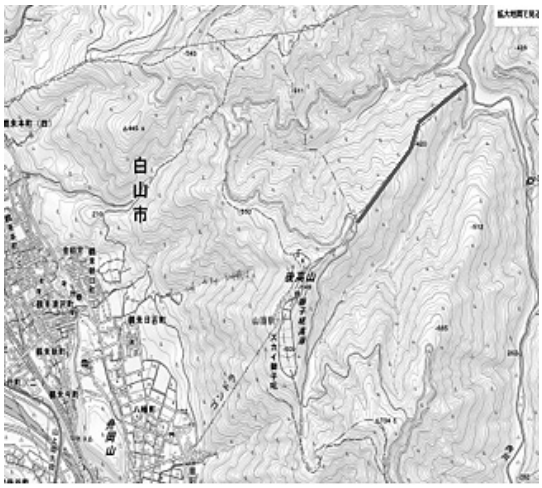
## 八、霊峰白山からくる信仰、淳上神社、小坂神社の物語

強力な白山信仰のもと、春日部君の一族が道君へと呼び名を変え、春日部から「加宜国、加我国」という国造名として名乗ったのではないかと考えます。(註20) もともと「加我国造」もしくは「賀我国造」は大兄彦命が名乗っていましたが、道君がその一族を支配して「加我」「賀我」そして「加賀」へとの呼び名となっていったとの考えがあります。

道君と称した春日部君が通った白山の道にはその痕跡が残っています。白山市河内地域の久保の春日神社、八幡地域の旧地名は春日村、春日明神を祀ってのち八幡神社を祀り八幡村となった歴史がありますが、その八幡神社の裏手には獅子吼高原が位置し「山の道」である犀鶴林道のルートを通って内川へ、さらに金沢の三小牛ハバ遺跡で発掘された三小牛の三千寺（みちでら）の建立とする足跡、小坂の春日神社の地での御所八塚山古墳群となっていきます。犀鶴林道のルートには、倉ケ岳があり、今も坪野からの道には熊ごろう、喫茶&食事倉ヶ岳があります。そこで、白山信仰からみる春日部君、道君の足跡を左図から、たどることとします。

実線は白山の「山の道」

白山市八幡町獅子吼高原と金沢市菊水町
内川ダムへの道（金沢と鶴来との近道）
https://yamap.com/mountains/19497 2023/09/18




実線は鶴来から　内川ダムへの道

## 九、垂仁天皇の皇子五十日足彦命について

古事記五十日帯日子王、日本書記では五十日足彦命となっています。北陸道で繋ぐ越国への大和王権の領土拡大に伴い、北陸開拓そして地域の貢献に寄与し、その一族をその土地その土地の開拓にあたらせたと考えます。

この皇子ついて、古代北陸においては大変重要な働きをしています。その足跡を地図で示します。垂仁天皇の皇子五十日帯日子王（五十日足彦命）を祀る神社を列挙します。

特に注目すべきは、上越市の春日神社と三条市の五十嵐神社・八木神社です。(註21) 春日神社はもともと春日山山頂に鎮座しており、その祭神は五十日帯日子王の一族「春日山君（かすがのやまのきみ）」とされています。現在は春日大社の祭神と同じです。また、(註22) 三条市の五十嵐神社・

八木神社については、五十日帯日子王が崩御された地であり、その一族高志池君（こしのいけのきみ）の子孫が神社を守護されてきたと伝えられています。

## 十、道君の始祖素都乃奈美留命を祀る瀬戸比古神社（崇神天皇の御代の創建）

素都乃奈美留命の系統が加賀郡から羽咋郡の志賀町へ移動したとなれば、その存在することの価値を誇示してのことではないでしょうか。中央政府からの追い出しを渤海との海上交易、加賀郡で支配したように福浦客院（渤海国との通商）を掌握して道君の存在価値を維持しようと考えたとすることが妥当と思われます。

## 十一、最後に

垂仁天皇の皇子大入来命を能登臣の祖とすれば、五十日足彦命も垂仁天皇の皇子。五十日足彦命の一族である春日部君と道君を結びつけることにより、白山道から導く「君」の存在を明らかにする事となりました。また、白山信仰の中心である白山市河内地域の直海（のみ）谷川（たにがわ）と能登志賀町瀬戸比古神社近くを流れる直海川（のうみがわ）は、同様の名前の川が付けられています。直海谷川が石川郡に所属していますが、能美郡と能登の繋がりをみてとれます。さらに、白山市八幡地域を含む旧河内庄は春日神＝道君＝春日部君となり、滓上神社周辺は能美郡に含まれますので、能美郡の名称についても(註23)直海谷川は「呑む川」「呑川」「濃美川」とも言われており、この「のみ」郡の名称は、ここからきたものと思っています。

また、「加我」の名称については(註24)尾張国（愛知県）の東北部のあった春部郡（かすがべぐん）、名古屋市の北部・小牧市・西春日井郡にあたる地域があります。昔「加須我倍（かすがべ）」と表現していますが、この言葉を略して「加我」となるので、これを加賀郡の国造名にも該当していってもよいのではないかと考えています。

では、加賀国の国府はどこにあったかの疑問が残ります。小松説か金沢説か、二つの国府所在地説があります。この滓上神社の麓に加賀国府が所在しています。加賀の国府について望月精司氏は(註25)『遺跡が語る国分寺整備』の加賀説について「統治すべき本拠地に国府を置くことに危険が伴うのではないかなど加賀郡に国府があったことに否定的な意見もある。かと言って小松に立国と同時に加賀国府が整備されたかと言うとその証拠は乏しい。」と述べています。以上の点から、道君が発展地金沢での国府拠点がクローズアップしている今日、道君の故郷である能美郡の滓上神社の麓に国府を移動することに納得し妥協していったのではないかと思うのです。

## ○参考文献


(註①・④・⑨)
『日本地名辞典石川県』角川出版刊行

(註②)
『先代旧事本紀巻第十国造本紀』ト部兼永筆本　神道大系古典編
『先代舊事本紀』「国造本紀」度會／延佳　校正
https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100241083/1?ln=ja2023/09/05
お茶の水大学所有
栗田寛著『国造本紀考巻三』
https://dl.ndl.go.jp/pid/993511/1/52023/09/05

(註③・⑬・㉓)
上山秀之著『河内村風土記』

(註⑤)
『古事記　祝詞』日本古典文學大系

(註⑥・⑧・⑱)
『日本書紀　上』日本古典文學大系

(註⑦・⑳)
『福井県史』原始・古代　序章

(註⑩)
『北國文華』二〇二三年春第九五号
森田喜久男氏の『水上交通要衝を掌握　したたかに生き残る』

(註⑪)
『加能宝鑑・図録　加賀国全図』小坂神社　河北部社寺の部翻刻

(註⑫・⑱)
森田柿園著『金澤古蹟志』

(註⑭)
『式内社調査報告』加賀國　皇学館大学出版部

(註⑮・⑯)
枚岡神社
https://okumiya-jinja.com/interview/interview 031/2023/09/04
天照大神高高座神社
https://jun-yu-roku.com/kawachi-takayasu-kyokoji-amaterasuokamita-kakura/2023/09/05

(註⑰)
『日本の神仏の辞典』(編集)
大島建彦、圭室文雄、薗田稔、山本節

(註⑲)
森田平次著；日置謙校訂『金澤古蹟志』

(註㉑)
風間幹栄著『越後国上杉謙信公居城春日山城総鎮守春日神社の歴史と文化財』
太田亮著『姓氏家系大辞典』

(註㉒)
『式内社調査報告』越後國　皇学館大学出版部
花ケ前盛明著『越佐の神社』式内社六十三

(註㉔)
西春日井郡春日村（愛知県の西部）
https://kotobank.jp/word/%E8%A5%BF%E6%98%A5%E6%97%A5%E4%BA%95%E9%83%A1-3065236
2023/09/04

(註㉕)
『北國文華』二〇二三年春第九五号
望月精司氏の『遺跡が語る国分寺整備』

## ○その他の文献

『新撰姓氏録』国書データベース（nijl.ac.jp）
https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100238683/4?ln=ja2023/09/04
『和名類聚抄』国書データベース（nijl.ac.jp）
https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100072412/1?ln=ja2023/09/04
日置謙著『加能郷土語彙　改訂増補』
「北陸道（二）高志道と北陸道」
鈴木正信著『日本古代の氏族と系譜伝承』
金崎肇著『金沢市北郊の都市化』
富山県地学地理研究論集
田中喜男著『城下町金沢』
「封建制下の都市計画と町人社会」
田中喜男著『わが町の歴史　金沢』